

遠台遺跡第 22 地点第 2 次発掘調査の報告

丸山 優香里

【遠台遺跡第 22 地点第 2 次調査概要】

所在地 水戸市中原町字西中根 845 番 5

調査原因 個人住宅建築に伴う発掘調査

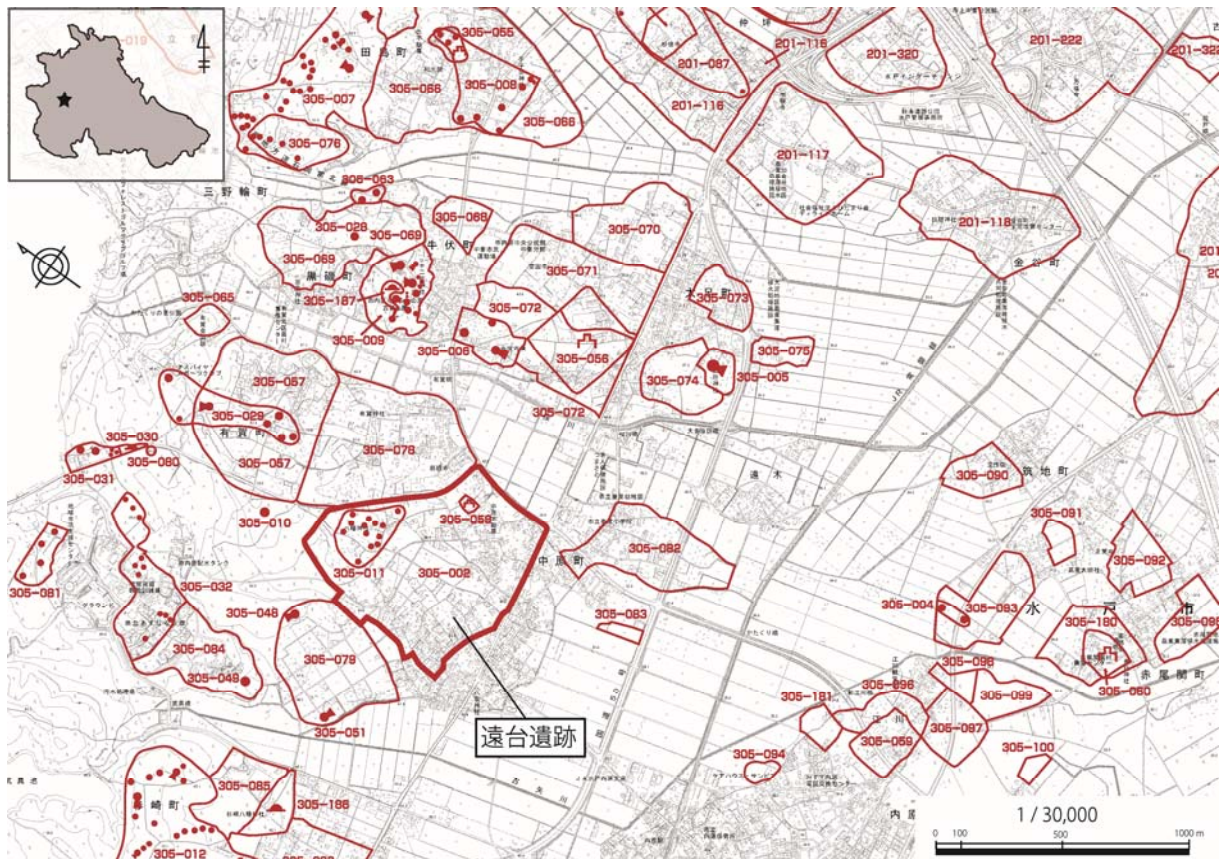
調査期間 平成 30 年 4 月 18 日～平成 30 年 6 月 15 日

調査面積 275.35 m²

調査主体 水戸市教育委員会（担当：丸山 優香里，米川 暢敬）

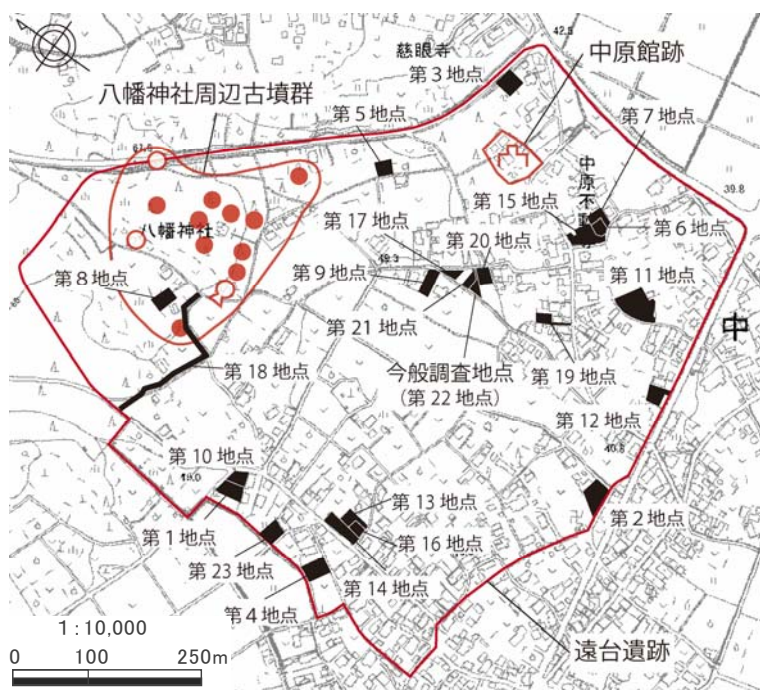
1 遺跡の概要

遠台遺跡は、桜川右岸に広がる標高 42～65m 程の微高地上、八幡神社から旧国道 50 号線までの宅地や山林、畑地に東西約 760m、南北約 710m にかけて展開する縄文時代中期から戦国時代にかけての複合遺跡である。当該遺跡が立地する（通称）友部丘陵は、支丘毎に大小の古墳群が多く形成されている茨城県下においても有数の古墳集中地域であり、遠台遺跡の範囲内にも八幡神社周辺古墳群（前方後円墳 1 基、円墳 12 基）が含まれている。また、同じく遺跡内には、江戸氏支城のひとつであり、国井善之輔が拠点としたという中原館跡が所在する等、有意義な歴史的景観をもつ。



第 1 図 遠台遺跡の位置と周辺の遺跡

2 遠台遺跡の既往調査



第2図 遠台遺跡既往調査地点

遠台遺跡では、平成18(2006)年の調査第1地点から現在に至るまでに23地点において開発に伴う試掘調査を実施している。その内、今般調査地点を含む7地点では記録保存を目的とした本発掘調査に発展している。

これまでの調査では、ほとんどの地点において古代の竪穴建物跡が確認されている。また、中原館跡に近い第7地点の本発掘調査においては、中・近世に帰属すると思われる掘立柱建物跡が6棟確認されており、当該時期の集落の存在が考えられる。

第1表 遺構が確認された既往調査

地点	調査種別	遺構	遺物
第7地点	試掘調査	ピット9基(中世)	土師質土器
	発掘調査	掘立柱建物跡6棟、土坑1基(中世)、土坑1基、ピット67基	土師器、須恵器、カワラケ
第11地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒、ピット2基(奈・平)	土師器
	発掘調査	竪穴建物跡11軒(古墳、奈・平)、掘立柱建物跡(?)5棟、ピット47基(掘立柱建物跡構成ピット含む)、性格不明遺構4基	土師器、須恵器
第12地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒(奈・平)	土師器
	発掘調査	竪穴建物跡1軒(奈・平)、土坑2基(縄文、奈・平)	土師器、須恵器
第13地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒、ピット5基、土坑(奈・平)	土師器、須恵器
	発掘調査	竪穴建物跡1軒(古墳)、掘立柱建物跡7棟(奈・平)、ピット37基(掘立柱建物跡構成ピットを含む)	土師器等
第14地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒	土師器
	発掘調査	竪穴建物跡2軒(古墳)、ピット11基、土坑1基(古墳)、溝跡2条(奈・平)	土師器、須恵器等
第18地点	試掘調査	堀跡1条	土師器、陶磁器、内耳土鍋
	発掘調査	堀跡1条(中世末～近世初頭)、井戸跡1基(近世)、ピット27基	瀬戸・美濃製品、常滑、土師質土器、古銭
第19地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒(古代?)	—
第20地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒(奈・平)	土師器、須恵器
	発掘調査	竪穴建物跡5軒(奈・平)、土坑2基、井戸跡1基	土師器、須恵器
第21地点	試掘調査	竪穴建物跡1軒(古代)、性格不明遺構1基	土師器
第22地点	試掘調査	竪穴建物跡7軒(古代)、ピット3基、土坑3基、性格不明遺構3基	土師器、須恵器、陶器

※検出遺構は試掘と発掘調査で重複する場合あり。



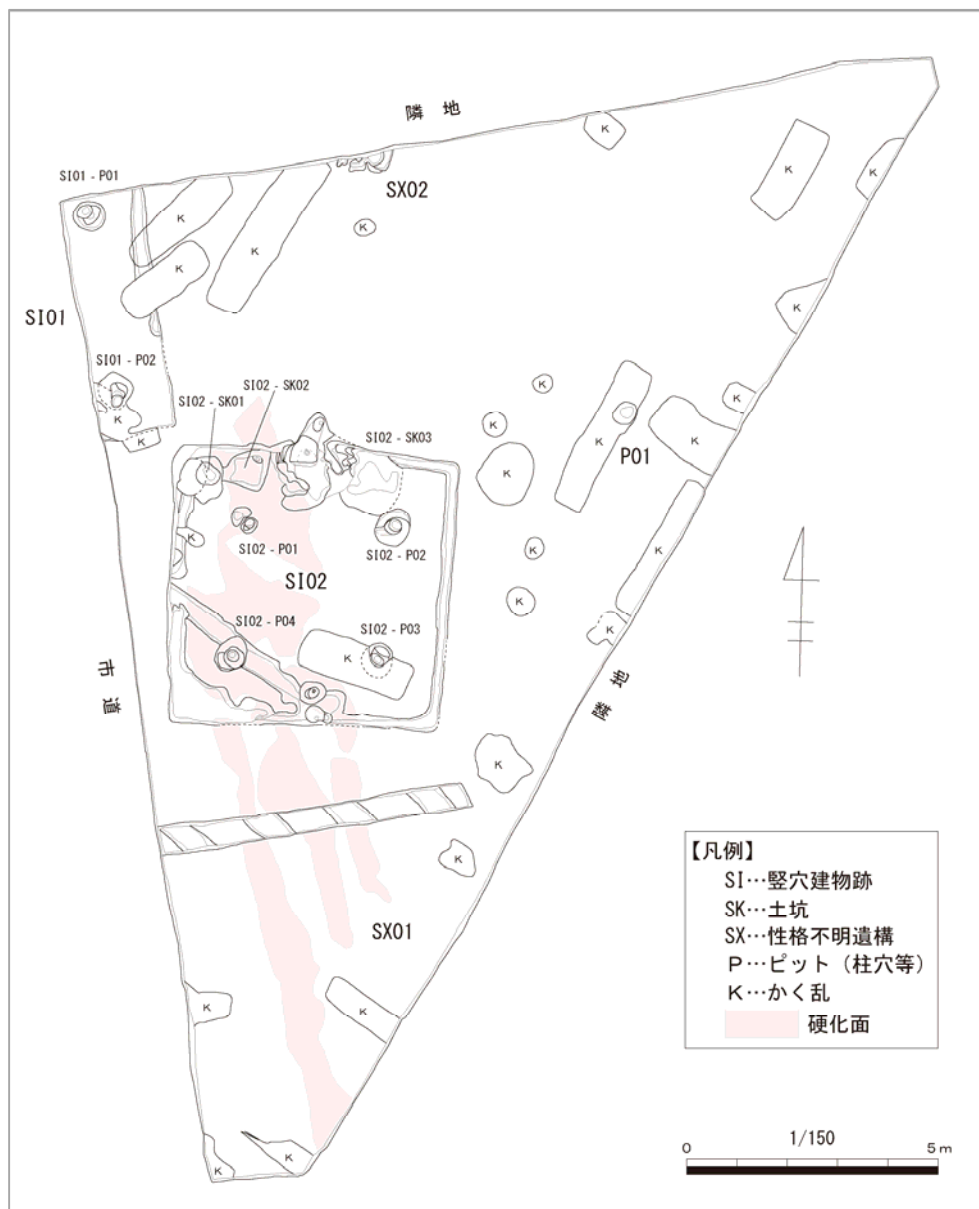
写真 1 堀跡 (SD01) 構築状況

【遠台遺跡第 18 地点検出の堀跡】

平成 30 (2018) 年 2 月, 遠台遺跡北端の台地縁辺部において発掘調査を実施した。当該調査では, 中世末から近世初頭のものと考えられる堀跡が新たに発見された。この堀跡は, 北側に土塁を伴う上幅が推定 5 m の薬研状の空堀で, 東西方向に長さ 100m 以上に亘って確認した。この堀跡は城郭跡の一部であると推定されるが, 周辺には堀を巡らせる

ような城や館等があったという伝承や記録は見付かっておらず, 短期間利用された当該地域における拠点的な施設の一部であったことが推測される。

3 調査の成果



第 3 図 遠台遺跡第 22 地点第 2 次遺構平面図

【堅穴建物跡 SI01】

規模・形状：一辺 4.5m 以上の方形。調査区内では全体の 1/3 程度のみを検出。

付帯施設：支柱穴 2 基（SI01-P01・02），東側の一部に壁溝をもつ。

遺物：土師器片，須恵器片等

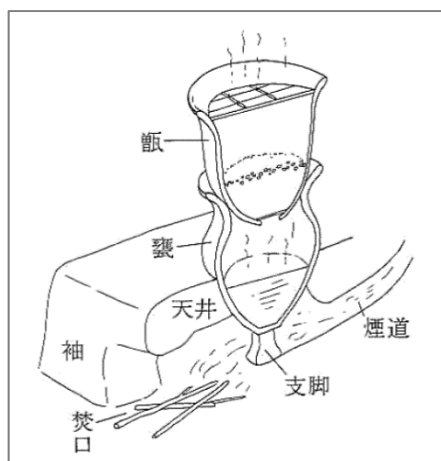
建物跡の大半が調査区外に延びるため，形状や規模等の詳細は不明であるが，出土遺物から 8 世紀第 2 四半期に帰属するものと思われる。

【堅穴建物跡 SI02】

規模・形状：一辺 5.5m の方形。耕作等によりかく乱されているものの全体を検出した。

付帯施設：支柱穴 4 基（SI02-P01～04）。北壁中央にカマドが設置され，南側に入口ピットを持つ。壁溝は建物を全周する。また，カマド周辺に土坑 3 基（SI02-SK01～03）を確認した。

遺物：土師器片，須恵器片，土製支脚，瓦等



第 4 図 一般的なカマドの構造



写真 2 SI02 支脚出土状況

カマドは部分的にかく乱を受けているが天井や袖の一部が残存しており，天井部分を外したところ，火床面直上から土製の支脚が原位置を保って出土した。また，SI02 の覆土中からはカマドにあるものとは別に土製支脚の一部が出土していることから支脚の交換が行われているものと考えられる。



写真 3 SI02 カマド付近遺物出土状況

SI02 の覆土中からは土師器・須恵器片が数多く出土しており，特にカマド周辺では須恵器の坏片が集中して出土している。これらの坏片は，形状から 8 世紀第 2 四半期に帰属するものと推測されるが，SI01 で出土した遺物よりは若干年代が下るものと考えられる。これらは，当該建物が廃絶されてから埋没するまでの間に流入あるいは廃棄されたものであると思われるが，床面に近い高さで出土しているため，この建物自

体の使用年代とほぼ同時期の所産と考えられる。



写真4 小型甕出土状況

カマドの袖部分では、ほぼ倒立する形で袖に立て掛けるような状況で完形の土師器小型甕が出土している。形状は高さ・直径ともに15cm程度で、口縁部は緩く広がり、底部は丸底を呈している。

この小型甕はカマドの掛け口に直接掛けるには径が小さ過ぎるが、底部付近は黒く煤け、かなり脆弱になっており、調理具として直火に掛けられていたことは間違いのないと思われる。また、この形状は古墳時代

に見られる土器に近似するが、建物の形状や他の遺物の年代は奈良・平安時代に帰属するもので、古墳時代から継続して使用していると考えるのは難しい。

⇒土師器は基本的に在地で焼かれる器であるため、奈良・平安時代まで地域的に形状が残っていたものか？



写真5 古瓦出土状況

さらに、小型甕の東隣においては、ほぼ完形の古代の平瓦が出土している。この古瓦は一枚作りで成形され、8世紀第2四半期頃の所産と推測される。

瓦はカマドの構築材や硯として転用されることがあるが、古代の瓦葺き建物は寺院や官衙等、非常に限定されており、茅葺きの建物が主体である一般の集落での出土は稀である。水戸市内では常陸国那賀郡の郡衙跡や古代寺院跡と推定されている渡里町の台渡里官

衙遺跡群にて多くの古瓦が出土している。それらの瓦は、周辺の複数の窯で製作されたもので、水戸市木葉下町の須恵窯である木葉下窯跡、ひたちなか市の原の寺瓦窯跡や奥山瓦窯跡等から運び込まれたものであることが分かっている。遠台遺跡に最も近い窯は木葉下窯跡だが、今回出土した瓦とは胎土が異なり、製作窯は現在のところ不明である。

《なぜ、遠距離の集落から古瓦が出土したのか？》

- ① 遠台遺跡周辺に官衙関連施設があり、そこから運び込まれた？

⇒遠台遺跡周辺には現在のところ、そういった遺跡の存在は確認されていない。また、存在するとすれば郷レベルの施設となるが、その建物に瓦を葺く可能性はかなり低い。

- ② 遠台遺跡周辺に未知の瓦窯が存在した？

⇒先述のとおり、今回出土した瓦は木葉下窯の瓦である可能性は低い。遠台遺跡のある中原地区の丘陵地は地形的には窯場に適しているが、現在のところ窯跡は確認されておらず、瓦の出土も今回が初となるため、更なる調査が望まれる。

- ③ 当時、遠台遺跡に居住していた人物が台渡里の役所もしくは寺院と何らかの関係があり、そこで不要となった瓦を再利用する為に持ち帰った？もしくは、遠台遺跡が瓦窯から台渡里に向かうルートにあたり、瓦の運搬の際の落下物？

⇒遠台遺跡がある水戸市内原町中原は、『和名類聚抄』によると常陸国那賀郡安賀郷に属していたとあり、台渡里廃寺跡出土の瓦にも「安」の字が確認されていることから、安賀郷との関係が示唆されている。また、安賀郷は、駅家間を結び、東山道と東海道をつなぐ古代官道の推定ライン上に位置しており、それは那賀郡家があったとされる台渡里周辺まで通じていることから、ヒトやモノの動きは十分考えられる。

3 まとめ

以上のとおり、今回の調査では8世紀第2四半期の帰属と考えられる竪穴建物跡2軒が確認された。過去には、本調査地点の両隣地でも調査を行っており、同様に古代の竪穴建物跡を検出している（第5図）。しかし、建物の軸や形状・規模の相違、出土遺物等から今回の竪穴建物跡とは年代が異なるものと考えられ、本調査地点周辺には長期間に亘って集落が展開していたことが判明した。また、今回は古瓦の出土から台渡里官衙遺跡群との関連についての推測も述べたが、直近の市道改良工事の立会の際に円面硯の底部片が出土していることも、集落内に文字を識る人物がいた可能性、ひいては里（郷）等の末端行政機関の存在を匂わせ、官衙遺跡との繋がりを強く窺わせるものとして併せて注視したい。

遠台遺跡においては、未だ調査内容は十分とはいえず、調査地点にも片寄りがある。今後は、第18地点の堀跡や各時代の集落の広がり、近隣遺跡との関係性等の不明瞭な部分に加え、今回の調査で新たに生じた疑問も視野に今後検討する必要があるものと思われる。



第5図 第22地点周辺の調査状況

【引用・参考文献】

- ・ 内原町史編さん委員会 1996『内原町史 通史編』
- ・ 内原町史編さん委員会 1992『内原町史研究』創刊号 内原町教育委員会
- ・ 水戸市教育委員会 2018『遠台遺跡（第18地点第4次）八幡神社周辺古墳群（第1地点第3次）』（水戸市埋蔵文化財調査報告 第102集）
- ・ 宮崎報恩会版 1969『新編常陸国誌』常陸書房
- ・ 長谷川伸三ほか 1997『茨城県の歴史』山川出版社
- ・ 竹内理三編 1983『角川日本地名大辞典 8 茨城県』角川書店
- ・ 川口武彦 2006「台渡里廃寺跡の文字瓦一辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告(1)―」『明治大学古代学研究所紀要』1号 明治大学古代学研究所
- ・ 立石友男ほか編 2012『地図でみる 東日本の古代 律令制化の陸海交通・条里・史跡』平凡社
- ・ 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2013『第12回特別展 古代のみち―常陸を通る東海道駅路―』